

平成19年2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

## 御嶽信仰をささえる御師

武蔵御嶽神社は、現在32軒の御師により運営されております。本来御師とは神社の運営には直接かかわることは出来ず、それぞれが広めた各地区の信仰組織である講への活動が職務でした。御師は信仰を広く伝播し、各地区の信者である講を組織させ、参拝の案内、宿泊や食事の提供、お札の頒布などを行い、神社祭典が専門の神職とは区別されていきました。江戸時代には、全国様々な神社の信仰が御師により広められます。しかし、明治になり国家神道となると御師の活動は禁止され、多くの御師は衰退していきます。

御嶽でも御師の生活は貧窮しますが、数年後に再び活動が許されると次第にその勢力が復活し、今まで以上に地位が向上していきます。そして神社も御師により運営されるようになり、御師は神社の神職家である社家となりました。さらに第二次大戦後は、御師の中から神社の最高責任者である宮司も選ばれ、神社の全てが御師により取り仕切られます。御師は神社への参画と、それぞれの講を運営する二重の活動を行うようになります。これは、他の神社では考えられず、大変珍しい形態といえます。

御嶽の御師は、江戸時代より代々世襲により継承されています。世襲のため、昔から長男は15歳になると「伝法」を受けます。最近はもう少し成長してから行いますが、一週間神社に参籠し、朝夕滝で禊を行い、三食自炊でお粥と漬け物だけの食事をとり、神道の基礎知識や神道作法（祭式）などを先輩神職から指導されます。慣れない生活を強いられる修行は大変な試練です。さらに、毎年行われる神道・祭式・雅楽などの講習に参加し、神道の知識をさらに深めます。また、神社に伝わる太々神楽の継承も御師としての大切な勤めで、講習は3月8日の春季大祭翌日より三日間行われ、ここで先輩より演技指導を受けます。

太々神楽奏上は、講による最も格式高い参拝として執り行われます。講にとっ

（裏面に続く）

て大変めでたい事ですが、経費もかかり最近では奏上が減りました。講より神楽の申し込みがあると事前に御師に周知され、奏上時には御師が集合し、その時の顔ぶれで長老がその日の演目をきめます。講習で覚えたての若手に割り当てる場合が多いのですが、昭和60年代に年間80を越す奏上が昨年は20回と、実践を通じて技を磨く場が減り、継承が難しくなりつつあります。

また、10月から3月頃にかけての講廻りも、御師の大切な仕事です。関東一円に広がる講の家一軒一軒を伺い、お札を頒布し、家によっては神棚や祠ほこらの祈禱きとうも行います。全ての講を廻るわけではありませんが、直接伺うことは、講組織の安定と、そこでの会話や質問が御師としての知識を深める事にもなります。御師は他の神社でもまだわずかに残っていますが、講に直接出向いて活動しているのは、御嶽だけのようです。これは、御師の長年にわたる地道な活動と、講の人々の理解があって続けられることですが、残念ながら講の軒数は減少傾向です。

(文責 須崎 直洋)